俳優三十六花撰叙

越後鮭を四斗樽に洗濯して篠哉腹へ張。伊勢海老は青竹を針に削りて継あてがひに鬚を綴る。牛房は藁にて袴を仕立半切る。赤い帯して鼠も少見よげなり。羽子板は美濃紙に衣紋を作れた。破魔弓は紅絹の裂にて鉢巻となすめり。橙子も笄とさし。飾物も饂飩の粉の白粉して非情きへも春とまれ粧ひのせうしるさま。して人間はなれくに暇なく。熨斗目の腰の横霞は火斗の陽炎よりえらべ。縮緬小袖の梅花の薫りは伏籠の室より咲出けん。羽二重はあかやかなる。緋麻のこそ強しきえ朧月の朧と裁縫つ家居も常よりは清らに掃ひ。障子は白く畳はあたらしく。稲生のなる君技埓の。塗るかしまで翔ひしを。彼貫之が今一色。五色に

香蝶樓
歌川國貞画

俳優三十六花撰 全

文榮堂上梓

足りと書しに似たれど。実　大江戸の難有さに押絵の
口とぢるまで。海の物山の物居ながら自由が樽のくち。四角に
あけて餅を搗香もなりぬと元旦の。屠蘇酒を忘れまい
ぞと。下戸の身に相応る。昆布搗芋し物。うりせられ節の
膳を。喰とありて突いぐし。原来庵の狭けれど。掃除まするに
骨もとれも。正月着の用意もるなれば。質屋へ借足の世話も
なし。鳴呼貧楽とは是をこそいふならめと。熟浮世
鑵子の蓋をとて手づから扨いづも。福茶を煎じはまりける。
大晦日の夕がた方。松とるつて竹町に。程遠から与四谷乃
書房。案内とあつて入来り。懐より出しくハちや彫なりし
一冊なり。組蓬莱をかざりながら。取ひろげて何ぞとつれまバ。

渡雲が鋳る熨斗鎮。亀井戸の筆ゆして。今三座に盛りと競ふ。
花と撰んで第一に。まづ木場の鯉と出し。鯡の数の三十六人是に
自筆の発句を集め。画題になずらふ物ぐさ。未それとが見ざれども。
一夜明れバ新玉の。玉を連ねし一言の葉あるべし　手机を拍て曰妙でんも
兆殿司昔の画工ハいざ知らず。其身其侭出られさせうに。画れしハ誰
ござらうぞ。歌川の哥の字。則歌仙の家の字でござれ。定家卿の
正本に。哥を詠むその難きはあらぬも。よく詠この雑ぞうし。似顔絵も
又然り。目を大きく鼻を高く。何某と見ゆる程まで。土蔵の壁にも現るれど。
よく似るその難きところを習ひうるなし画の妙義。初卯詣に
國貞子を。明なバ訪んといひ居れバ。その時本屋膝をすゝめ。まづ讃
詞の後にして直に此序を書よといふ。其きろうけに弓張提燈。腰の

矢立を折つゞくらくと込める掛ヶ此大詰をきり抜て。松すぎぬハ
橋本とぞ云べしと断れども。更に耳ふも入られず。側の重詰を指
示して予ふいへらく。座禅豆のかゝびたる。鰊鯑の生漬なる。誰人か
それを喰者あらん。繪本の叙文も其如し。讀者ハよるなれども。
塞いでおくが吉例なり。扣牛房のたゝきなぐり。どうでもよいと
猶免さも。實に彼がいふに違ハぞ。節料理と不文とハ。別ふ
替りし曲もなし。鱓膾の塗ゑて。ちよいと色を付ておけバ。
まで祝儀ハすむことく。頓て筆を把あげつ。彼絵草紙を操
えせも。なや春めきし白酒賣。着付ハ橋外良ハ。代にく
續てし鰕の羽織。これハ小田原神馬藻。三升ハ組入尉斗
菱も。福包の形とよんなされ。師匠から標の。画人乃印の

○の字さへ。輪飾のやうふ思され。鳳尾草の蟋蟀の。飛ざ
事から時ながらの。物よむなり目がつゐて。序文らしき趣向も
浮まず。とかくする間に鶏もうたひ。東の方ちむに驚かれ。唯
其夜の有のまゝを。礼帳の横綴へ筆にまかせて杜若。其
定紋の扇くの。声に全く明なるれ
おもはず吉書となりしもをかし

天保六年未正月

柳亭種彦記

市川團十郎
山下金作

坂東三津五郎
おさ乃
やんぜう
我かる

坂東喜左衛門
祇
あしまちの
せいきん
さいハ

三枡源之助
世乃
浮世の

岩井杜若
三浦屋の
あげまき

市村羽左衛門

和花の三人
源九郎義経
市川海老蔵
石川五右衛門
松本幸四郎
三日月於勢ん
岩井杜若

福山
福山

白猿
木墳の
秋雨庵

三夕

こゝには花も紅葉もなかりけり
風雅とは木墳の秋の夕暮　忠悲牛

応需 [illegible]溪圖

杜若家戸門
柳湾詩

和清と花のたよね秘歌添めに并ふ
名高き花本所の當蝶楼に深く縁に
まくての筆をそえ三千六花撰と
號清書ぬる秘編ところにまつりそそ
清てそのとくさや幕の末茂いる
ことたいふすなるそ

司馬園主人

俳優三十六花撰全部三巻　歌川國貞画

此集に洩たる役者追て編を續出板仕候

天保六乙未年正月發行

江都　馬喰町二丁目角　西村屋與八
　　　四谷傳馬町三丁目　中村屋勝五郎